

平成21年度病害虫発生予察注意報 第6号

平成21年8月7日

大分県農林水産研究センター

安全農業研究所

対象作物：普通期水稻

対象病害虫：いもち病（穂いもち）

1 対象地域 県内全域（主に中山間地）

2 発生時期 出穂期以降

3 発生量 やや多い

4 発表の根拠

- (1) 梅雨明けが8月4日と遅れ、葉いもちの発生しやすい気象条件が長く続いたとともに、長雨により適期に防除ができなかった圃場が多く、中山間部を中心に病勢の進展している圃場が認められる。
- (2) 安全農業研究所が7月30日～8月3日に実施した巡回調査では、葉いもちの発生圃場率は66.7%（平年61.9%、前年70.0%）と平年並、平均発病度は4.5（平年5.8、前年6.3）とやや低かった。病斑はほとんどが停滞型に移行しているものの、進行型病斑も認められており、一部地域からは葉いもちの多発情報も寄せられている。
- (3) 農林水産研究センターの県予察田での葉いもちの発生は、8月5日現在全株で認められ、平均病斑面積率はユメヒカリで1.04%、ヒノヒカリで0.59%、おおいた11で0.45%、ひとめぼれで1.64%と高く、上位葉の進行型病斑比率も高い。
- (4) イネ葉いもち発生予測モデル（BLASTAM）によると、本年は7月26日～8月4日にかけても感染好適条件が出現している（表1）。
- (5) 農林水産研究センター水田農業研究所（宇佐市）が実施している普通期水稻の生育概要は8月5日現在、草丈は高く（平年比106～108%）、茎数は平年より少なく（平年比74～78%）、葉色は濃く徒長気味の生育をしている。
- (6) 病害虫防除員の報告によると、一部地域で例年より発生が多くなっている。
- (7) 本病は冷涼、少照条件が発病に好適であるが、7月31日に発表された8月の1か月予報によると、気温と降水量は平年並、日照時間は少ないと予想されている。

5 防除上注意すべき事項

- (1) 葉いもちの発生が多い場合は、直ちに防除を行い、穂肥をひかえ目に施用する。
- (2) 穂いもちの防除は、出穂約2週間前の粒剤施用と穂揃期の液剤又は粉剤散布、あるいは穂ばらみ期と穂揃期の液剤又は粉剤による2回散布を基本とする。また、出穂期を見極め、防除適期を失しないよう注意する。
- (3) 「あきまさり」など本病に弱い品種の作付けが行われている地域では、特に注意が必要である。
- (4) 穂肥の過剰投与は、本病の発病を助長させるため、注意が必要である。
- (5) 防除薬剤は、大分県農林水産研究センター安全農業研究所ホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」を参照し、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）に注意する。（ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/oita/>）

表1 BLASTAMによる感染好適条件の発現状況（7/26～8/4）

月/日	院内	日田	玖珠	竹田	佐伯	宇目
7/26	—	—	—	—	—	●
7/27	—	—	●	●	—	●
8/1	—	●	—	—	—	—
8/2	●	—	—	—	—	●
8/4	●	—	—	●	—	●

注) ●が感染好適条件の出現を表す。

感染好適条件出現の約一週間に初発病斑が認められ、約二週間後に病斑が目立ってくる。